

水球(Water Polo)の伝播と各国の受容に関する研究

高木英樹・真田 久

A historical study about the worldwide diffusion of water polo and acceptance in each country

TAKAGI Hideki and SANADA Hisashi

1. はじめに

水球(Water Polo)は、英国(Great Britain)^{註1}を發祥の地とし、当初はプロフェッショナルが観客を魅了するための水上アトラクシオンの要素が強く、各地域で独自のルールで実施されていたが、1888年にアマチュア水泳連盟(Amateur Swimming Association: ASA)が統一ルールを作ることで競技スポーツへと転換が図られた¹⁾。そして同年(1888年)には、統一ルールの下でイングランド水球選手権が開催され、これ以降、競技スポーツとしての水球が定着し、発展していった。さらに1892年には英国統一ルールが制定され、イングランド対スコットランドの対抗試合が行われるなど、競技としての水球がさらに洗練され、英国国内で大きな人気を呼ぶことになる。

この流れは英国国内に留まらず、ヨーロッパ大陸やアメリカ大陸にも伝播していった。1900年の第2回パリ・オリンピックでは、水球がオリンピック団体競技として初めて実施されるなど、当時の欧米社会において注目されていたことがうかがえる。

しかしながら、英国で生まれた水球が、いかに他国に伝播し、国際的スポーツとなったかについては、これまで明らかにされていない。そこで、本研究では水球が英国国外に普及する過程を、水球の伝播に伴うルールの変容と関連させて明らかにする事を目的とする。

2. アメリカ合衆国およびヨーロッパ各国への伝播

英国において、1888年ASAが統一ルールを制定し、スポーツ競技としての水球が確立されたの

を契機に、水球が英国国外へと伝播した。同年、イングランドのクラブにおいて水球のプレイ経験をもつジョン・ロビンソン(John Robinson)^{註2}が米国(United States of America)に渡り、はじめて水球を紹介している²⁾。数年遅れてロンドンで水球を学んだフリッツ・クニーゼ(Fritz Kniese)^{註3}は1894年に祖国のドイツで水球を広め³⁾、1895年にはドーバー海峡を隔てて英国の隣国であるベルギーにも水球が紹介されている。同時期にフランスでも水球が行われるようになったが、組織化された形で発展するのは1898年になってからである⁴⁾。またハンガリーでは、英国の雑誌を見ていて水球に興味を持ったフゼーレッシ・アルパード(Füzéressy Árpád)^{註4}が水球のルールブックとボールをハンガリーに導入し、1899年に初めてハンガリーで水球の試合が行われた⁵⁾。

この伝播は偶然に起きたのではなく、その背景には社会的あるいは地理的要因が関連し、いずれも水球發祥の地、英国と深いつながりを持つ人物を介して伝播して行った。しかしながら当時英国で行われていた水球そのものが導入されて、相似形として各国において発展していったのではない。各国の実情に合わせて、様々に形を変えながら、その土地柄に合わせて水球が根付いていったと言える。そこで、どのような経緯で各国に水球が伝えられ、受容されて行ったかを個別に見ていきたい。

2.1. 米国(United States of America)への水球の伝播

英国以外の国で初めて水球が行われたのは米国であり、イングランド人のロビンソンが1888年にボストン・アスレティック・クラブ(Boston

Athletic Club)に水球ゲームを導入したのが始まりとされる²⁾。1888年当時、英国では大幅なルール改正が行われ、水球のスタイルはラグビー型からサッカー型へと転換しつつあったが¹⁾、ロビンソンがアメリカに伝えたのは、古いラグビー型の水球であった⁶⁾。ラグビー型水球では、プールエンドのゴールエリア上にボールを置いた場合のみ得点となる。試合展開はラグビー同様、陣取り合戦の様相を示し、水中で両チームの選手がボールを巡ってタックルを繰り返す非常に激しい攻防が繰り返された。

アメリカの観客はこの水中での激しい肉弾戦に魅了され、水球は大変な人気を博する事になる。アメリカ国内における最初の試合^{註5)}は、1890年にボストン・アスレティック・クラブとシデナム・ロードアイランド水泳クラブとの間で行われ、シデナムが2-1でボストンを下した⁷⁾。その後水球は、アメリカ東部各都市の水泳クラブに導入され、シカゴ、マンハッタン、ミズーリー、ニューヨーク、ピッツバーグなどのクラブで盛んに行われた⁷⁾。当時の人気振りを示す例として、マジソンスクウェアガーデンに14,000人もの観客が訪れ、水球に熱狂したとの記録もある⁶⁾。さらに水球はアメリカ西海岸へと広がり、1910年代にはカリフォルニア州のロスアンゼルス・アスレティック・クラブやサンフランシスコ・オリンピック・クラブなどでも盛んに行われるようになった⁸⁾。

東部のクラブでは、気候条件により屋外プールの利用期間が限られ、結果的に非常に小さな室内プールしか水球専用として使用できない状態であった。たとえば前述のボストン・アスレティック・クラブとシデナム・ロードアイランド水泳クラブとの試合は、長さが37フィート(11.3m)で幅が2レーン分しかない小さなプールで行われた⁷⁾。このような環境では、パスやシュートが容易にゲームエリアを越えてしまい、サッカー型の水球ルールを適用するのは困難であった。そこで、アメリカでは伝播当初から使用可能なプールスペースにゲームを合わせるために、様々な試みがなされた。最も顕著な差異は、ゴールターゲットとシュート方法である。英国において、すでにラグビー型からサッカー型へと変化し、プールエンドにゴールポストとクロスバーが設置され、その間をボールが通過すれば得点とされたのに対して、アメリカでは、プールエンドあるいは、プールの

壁にゴールエリアが設定され、そのエリアに選手がボールを置く事によって、得点と認められた⁶⁾。

また英国では、革製のサッカーボールが用いられていたのに対して、アメリカでは柔らかいゴム製のボール^{註6)}が用いられていた⁹⁾。時にはこのボールを水着の中に隠し、相手の目をくらませるために水中に潜り、再びゴールエリア前に浮上して得点を狙うトリックプレイも行われた⁶⁾。

1チームの人数も英国では7人で行われていたが、アメリカではプールが狭いので、センター、ライトフォワード、レフトフォワード、ライトバック、レフトバック、ゴールキーパーの6人で構成された¹⁰⁾。

このように狭いプール環境に適合させるため、人数やゴール、得点方法の変更を行ったわけだが、結果的にこれらのルール変更は、ゲームそのものの様相を変えることになった。つまりサッカーのようにパスを多用するのではなく、ボールを保持したままゴールに突き進もうとする選手に対するコンタクトが増大し、ボールへの密集やボールを巡っての格闘が頻発した¹¹⁾。当時のゲームの様子を伝えるフランス人G. Villepionの記述¹²⁾によれば、「水球の戦術は、ボールを持つ味方のプレイヤーを囲み、『全員一致して』(中略)敵サイドに押し込むことだ。ボールを抑えている者こそ悲惨だ。ボールを放すまで、水に沈められ放しである。ボールから2m付近にいただけで水面下の『痛めつけ』に逢う。」

このように英国から伝播した水球は、米国において初期の英国での野蛮さを凌駕するほど粗暴化し、やがて英国のWater Poloと区別するためにSoftball Water PoloまたはAmerican Water Poloと呼ばれ、独自の発展を遂げるようになった。

そして1904年の第3回セントルイス・オリンピックにおいては、外国からのエントリーがないまま、ニューヨーク・アスレティック・クラブ(New York Athletic Club)、セントルイス・アスレティック・クラブ(St Louis Athletic Club)、シカゴ・アスレティック・クラブ(Chicago Athletic Club)の米国クラブチームのみが参加して、水球の試合が行われた。ボールはもちろんゴム製の柔らかいボールが用いられ、セントルイスの博覧会々場内の池に設けられた特設会場で行われた。試合は、ニューヨーク・アスレティック・クラブが優勝するが、池の水質に問題があり、オリンピックの試合後3

人もの選手が死亡するという惨事が発生した。

2.2. ドイツへの伝播

水球がドイツに伝播したのは1894年のことであつた。フリッツ・クニーゼ(Fritz Kniese)は、ロンドンで水球と出会い、ベルリンに帰った時に自分のチームであるボルシア・ベルリン(Borussia-Berlin)にこのスポーツを取り入れた¹³⁾。だが、当初ベルリンの水泳クラブの反応は冷ややかなものであつた。その理由は、ほとんどのメンバーが実際の水球の試合を見たことがなく、その本質を理解していなかった事にある。そこでフリッツ・ドレーマー(Fritz Droemer)は、1897年にベルリンで水球の詳細を紹介する講演を行った。講演の内容は専門誌「スイムスポーツ(Schwimmensport)」に掲載されたが、これが大きな反響を呼び、ドイツでの水球に対する関心を呼び起こした。水泳の競技力向上に果たす水球の長所が認知され、水球のトレーニングを始めるチームが増え始めた¹⁴⁾。

1898年には、ウルリッヒ・ベアー(U. Baer)がドイツ語版の水球ルールを作成したが、当時の英国ルールとはいくつかの点で異なっていた。英国では既に幾度かのルール改正を経て、パスを多用するサッカー型へと移行していたが、当初ドイツで行われた水球は、古い英国ルールに準拠し、どちらかと言えば単調で、観客にとってもプレイする選手にとってもあまり魅力的とはいへなかつた。そこでドレーマーは1900年にルールを根本的に改正し、最新の英国のルールに近づけるよう文言の整理を行うと同時に、ドイツ独自のルールも導入した。例えば、素早いボール回しを実現するために、「ボールを持ったまま、あるいはボールを高く掲げた体制でのスイムを禁止する」あるいは、「相手選手に対するいかなるタックルも反則とする」規則が導入された。この点が当時の英国ルールとドレーマーによるルールの最も異なる点である¹⁵⁾。

ベルリン水泳連盟(Berliner Schwimmerbund)は、ドレーマーによるルールに基づいてのみ試合をすることを直ちに決定し、これに多くのチームが従つた。しかし、ドイツ全体にまでは広がることはなかつた。英国でもそうであつたように、新ルールに従わないチームがいくつもあり、チームごとに独自のルールが作られていた。たとえば、英国のルールを忠実に守りながら試合をするチーム¹⁶⁾や、ベアーによるルール(1898年)から離れない

チームもあり、クラブ同士の試合を行うのに、かなりの混乱が生じた。そのため、一刻も早い統一ルールの導入を望む声が高まつた¹⁶⁾。

1904年にハンブルク水泳クラブにおけるルールを、ドイツ水泳連盟(Deutschen Schwimm-Verbandes)の統一ルールとして導入することが役員会で決定された。しかし、実際には連盟のルールでは、タックルを認めていたため、ゲームが粗暴化する¹⁷⁾ことが懸念されて、多くのチームが水球ゲームから撤退してしまつた。このためドイツの協会では安全でフェアなゲームになるよう、さらなるルール改正の必要が生じた。1905年にルール改正を行う委員会が設置され¹⁸⁾1905年から1906年にかけての冬に改正ルールがまとめられた。連盟は1906年の総会で、この改正ルールをドイツ水泳連盟の公式ルールとして採用し、1906年9月1日から施行した。

タックルは新しいルールでも認められていたが、審判の権限が拡大され、ゲームをよりコントロールしやすくなつた。こうして当時の英国ルールと殆ど差がなくなつたが、多くのチームが水球の試合ではどんな形であれタックルは禁止すべきだという立場を主張したため、ルールを改正したにもかかわらず、水球の普及を放棄するクラブも現れた¹⁷⁾。

このようにドイツにおける水球は、スイマーのトレーニングという観点から、英国のルールに準拠しながらも独自のルールを取り入れて発展してきた。その結果、地域やクラブによってルールが異なり、ゲームを運営する上で混乱が生じる事態となつた。混乱を解消するために統一ルールが作成されたが、通信手段が限られ、情報伝達速度が遅い時代であつたため、必ずしも統一ルールがドイツ国内にあまねく広がつたわけではなかつた。

2.3. ベルギーへの伝播

1875年以降ベルギーにおいては、いくつかの水泳クラブが創設されるが、その母体の多くは漕艇クラブであつた。はじめは漕艇クラブの一部として水泳部門が設立され、その後独立した組織形態へと移行するケースが多く見られた¹⁸⁾。

ベルギー水球の黎明期に関する記述¹⁹⁾によると、1878年に創設されたブリュッセル漕艇クラブ(Cercle des Régates de Bruxelles)の場合、設立後の早い段階からメンバーはスポーツとしての漕艇や水泳に取り組み、各々の種目で後にベルギー代

表となるような優秀なアスリートを数多く輩出した。そのメンバーは、アングロ・サクソン文化に極めて通じ、ベルギーに定住する英国入植者らと職業上の交流も深く、英国での流行に敏感であった。1895年以降、彼らは積極的に英国で流行するスポーツを試みるが、その中に当時大変人気を博していた水球があった。水中において片手でボールを投げ、サッカーのようにゴールに入れるという目新しいスポーツにすぐさま多くのメンバーが興味を持ち、漕艇クラブ(Cercle des Régates)の中に水球部門が設立された。水球のゲームはプレイする者と観る者の双方を惹きつけ、1896年3月1日には、オステンド(Ostende)の寡婦や孤児のためのチャリティー祭に余興として水球の試合が行われた。その試合に対する観客の反応は非常に良好で、これを契機に多くの漕艇クラブ内に水泳(水球)部門が設立された。

それらの水泳部門がさらに発展して1897年にはブリュッセル水泳・水球クラブ(Brussels Swimming and Water-Polo Club: BSC)が設立された。BSCは、1883年に開設された王立浴場(Bain Royal)をホームプールとして、クラブの水球強化に力を注いだ。その熱の入れぶりは、「クラブの目的として水球競技の普及により、水泳の振興を可能な限り図ること」と明記するBSCのクラブ規約²⁰⁾からも読み取れる。水球の普及が目的であるからには、当時のスペシャリストだった英国選手たちとの試合を増やすべきだということで、1898年以降は毎年1回、強豪クラブとして有名なイングランドのOtter SCとBSCとの間でホーム&アウェイの試合が行われ、第1回目の試合がロンドンで開催された。その他にもDover SCをはじめ、英国とベルギーの交流試合が行われるようになるが、これらは言うまでもなく地理的に近距離であることと、ドーバー海峡を横断する交通の便によるものであった。

英国と交流することで発展を遂げたベルギーの水球は、必然的に英国のルールや試合環境を踏襲していった。したがって、英国国外への伝播の中で、ベルギーの水球がもっとも英国スタイルの水球を伝えたといえる。

こうした熱心な新規開拓意欲により、BSCは水球のデモンストレーションを含む水泳競技会を運営する事になる。1897年にはブリュッセル万国博覧会にも組み入れられ、外国人を含む多くの市

民に水球の面白さを伝えた。

2.4. ベルギー経由によるフランスへの伝播

フランスにおける水球は、直接英国から導入されたのではなく、ベルギーを経由して1896年から1898年の間に伝えられたと考えられる。1896年にベルギーのオステンド(Ostende)で行われたチャリティー祭における水球の模範試合を、フランス・リール浴場(Bains Lillois)のレオン・ベルドール(Léon Verdonck)が観戦した際、関心を抱いた事がきっかけとなり、リール(Lille)とトゥルコアン(Tourcoing)の水泳クラブに水球を紹介した²¹⁾。ベルドールの熱心な普及活動によって、その後リールとトゥルコアンの2つのクラブと国境を挟んだベルギーのBSCとの間で定期的に試合を行うことになる。第1回目の試合は、他の水泳8競技と共に、1898年7月14日、革命記念日の祭典において実施された。この時行われた水球の試合に関して、北フランスの地方紙は、この催しを破格の扱いで取り上げ、関心の高さをうかがわせる²²⁾。

しかしながら1890年代のフランスにおいて「スポーツ的」と呼ぶことができるような水泳クラブは主にフランス北部で幾つかしか存在していなかった。ようやく1898年になってポール・バルシェ(Paul Blache)^{註11)}の働きかけによって、首都パリに初の水泳クラブ(Libellule de Paris)が創立される程度であった²³⁾。このように当時、水球はパリ以北のベルギーと隣接した限られた地域でのみ実施され、競技レベルも高くなかった。例えば泳法に関しては、英国の水球選手が既に取り入れていた、トルージェントストローク^{註12)}を用いるフランス人選手はほとんどおらず、移動速度に大きな違いがあった。ルールに関しても、フランス・スポーツ協会(Union des Sociétés Françaises de Sports Athlétiques:USFSA)の会長であったセイント・クレアー(G. De Saint Clair)による水泳の著書²⁴⁾において、英国の水球ルールを紹介しているが、わずか9項目しか記載されておらず、ルールも未整備の状態であった。

しかし1899年にUSFSAの中に水泳委員会が設立されたのを契機に、スポーツとしての水泳の認知が高まり、1899年から水泳のフランス選手権(水球は除外)が開催されるようになった。そして1900年のパリ万国博覧会の開催に合わせて、パリ・オリンピックが開催され、団体種目として水球が始めて採用された。試合は、1900年8月11

日～12日まで、セヌ川の特設会場(Basins d'Asnières Courbevoie)で行われ、フランスからは4チーム^{注13)}が参加した。残念ながらフランスチームは準決勝までにすべて敗退し、決勝戦はBSCのメンバーを中心とするベルギーとマンチェスタークラブ(Manchester Osborne Club)のメンバーを代表とする英国との間でおこなわれ、英国が7対2で勝利を収める²⁵⁾。この試合を契機としてUSFSAは水球を飛込競技、競泳、遠泳と同じ資格で水泳競技の公式種目の一つと認め、同年(1900年)水球のフランス選手権が開催され、初代選手権はリールのPupille de Neptune de Lilleが獲得した。

1900年以降、水球はフランスにおいて拡大を続けるが、英国とは異なる発展を遂げる。特に大きな違いは、試合の環境である。フランスにおける初期のプールは、1884年以降パリとリール地方に作られるが、他の地方では、泳ぐことが出来る場所といえ、ボルドーのドック、マルセイユの港、リヨンのソーヌ河など、多くの場合は川や湖であった。水球がフランスに普及し始めたころ、既に英国では、衛生学的な見地から、公衆浴場の建設が進み、水球の練習や試合の多くはプールで行われるようになっていた。しかしフランスではプールの建設が進まず、水球の競技スペースは、ほとんどが野外の水辺であった。したがって、実際の試合においては、流れや水温、あるいは水の透明度など様々な条件によって、常に不確実性が伴っていた。フランスにおける1890年代から1910年代までの水球は発展が遅れ、英国における1870～80年代の水球黎明期と同様の状況であったと言える。

2.5. ハンガリーへの伝播

1890年代にブダペスト(ハンガリー)で弁護士をしていたフゼーレッシ・アルパード(Füzéressy Árpád)は、世界の情勢を知るために購読していた英国の水泳雑誌で水球のを知り、早速イングランドのASAに手紙を書き、水球ルールブックを取り寄せた。さらにハンガリー運動競技クラブ(Magyar Athletikai Club: MAC)の陸上監督であったヘリ・ペリ(Harry Perry)がちょうど英国へ帰国する折に、布で覆われたゴム製の水球ボールを送ってくれるよう依頼した。ボールが届くとすぐに、フゼーレッシは、自らがメンバーであったハンガリー水泳同好会(Magyar Úszó Egyesületben:

MUE)の選手が練習していたチャーサール・プールへそれを持っていき、ハンガリーで初めて水球の練習が始まった²⁶⁾。さらに、フゼーレッシはゴールと帽子、ジャッジ用旗を作らせ、1897年には、水球試合を行うための条件が全部揃った。しかし、水球は競泳の単調な練習を面白くするための、補足的練習としてしかみなされなかった。

1899年にバラトニ・カーロイ(Balaton Károly)とエユリ・ラヨッシュ(Ejry Lajos)がバラトン湖(約5キロ)を泳ぎ切り、それが報道されると水泳は全国的に注目を集めはじめた。そうして水泳への関心が高まりつつあった1899年7月30日、シオ川で行われた水泳イベントにおいてMUEのメンバーが初めて水球の模範試合を行い、1対1の引き分けで終わった。それを目にした観客は、レスリングのような新しいスポーツが非常に気に入ったようであった。当時の様子は「ある選手が相手を水中に沈めた時、観客同士が握手したり、笑ったりした。沈め合う事の方が得点場面よりも人気が高かった」²⁷⁾と記述されている。

最初の模範試合を契機に水球は注目されるが、しばらくすると停滞し、水球の試合はほとんど行われなくなった。そこで、このような状態を危惧したバラトニは、ハンガリー水泳同好会から退会し、1900年の秋に水球の普及促進を目的としてバラトン水泳同好会(Balaton Úszó Egyesületben: BUE)を設立した。1901年にはハンガリーの水泳選手権に水球が追加され、MUEが非公式ではあるが、最初のハンガリー水球選手権優勝チームとなった。その年の暮れ、1901年12月15日にウィーンでハンガリー優勝チームのMUEとウィーネリアスレティッククラブ(Wiener Athletiksport Club: WAC)の試合^{注14)}が行われた。試合はWACが14対0でMUEに圧勝し、ハンガリー選手は実力の差を見せ付けられる。実際、練習不足のハンガリー人選手は脚に痙攣を起こして、プールの縁で何回も休憩を取らなければいけなかった。また、ボールも自国の物と異なり、オーストリアでは重くて、水面で弾まない革のサッカーボールが使われた。この敗戦を期に、選手たちはさらに熱心に水球に取り組もうとするが、プールの一般利用客がプール管理者に対して「水球用のボールがぶつかって危険である」などの苦情を寄せたため、結局水球は、どこのプールでも禁止になった²⁷⁾。

しかし、1903年秋にハンガリー運動競技協会

(Magyar Athletikai Szövetség: MASZ)が水泳部門を編成すると、転機が訪れた。当時はスポーツのほとんどが別々の協会を持たず、全てMASZが統括していた。水泳部門ができたことで国内選手権を催す機運が盛り上がり、1904年に水球のルールブックがハンガリー語で完成し、最初の水球選手権が開催され、BUEが公式の初代ハンガリーチャンピオンに輝いた。

ところが最初の選手権以降、ハンガリーの水球界は再び停滞する。水球をする選手はまだ少なく、たとえ試しにやっただとしても多くの選手は競泳に戻ってしまった。当時の水球では退水ルールがまだなかったため、あまりに暴力的であったため、一般に受け入れられなかったことが原因と思われる。

1905年に規則が改定され、退水のルールができたが、水球に戻るのに抵抗を感じた選手は少なくなかった。従って、第2回ハンガリー水球選手権(1905年8月24日)にも4チームしか参加せず、次の1906年には、わずかに3チームに減ってしまった。水球選手権は夏に行われたが、夏は競泳のシーズンでもあったので、水球より競泳に専念している選手が多く、十分な選手数を確保できない状態が続いた。夏に競泳、冬に水球が開催されるのが理想的ではあったが、当時は冬に水球を行う適切な屋内プールがまだなかった。そうして1907年までハンガリー水球界は停滞を続けるが、1907年12月12日に首都にある12クラブと地方の8クラブを集めて、MASZから独立した水泳協会を設立したのを機に徐々に発展の兆しが見られた。さらにサッカークラブとしても人気があったフェレンツヴァーロシ体育クラブ(Ferencvarosi Torna Club: FTC)が水球に参入した事で、ハンガリーにおける水球ファン層が拡大し、やがて国民的スポーツへと発展していった。

3. オリンピックと国際競技連盟発足による統一ルールの策定

1888年以降、アメリカ大陸及びヨーロッパ大陸に拡大した水球は、母国の英国における発達過程に運行しながらも追従する側面と、各国の状況に合わせて独自の発達を遂げる両面を持ち合わせていた。しかしながら、いずれの国においても、初期段階における水球の位置づけは、競泳トレーニングの補足や気晴らしであったり、祭典における興行的な要素が大きかった。しかし1900年パ

リ・オリンピックで開催種目として採用された事によって、水球の注目度は高まり、さらに国際水泳連盟(Fédération Internationale de Natation: FINA)の発足に伴う国際統一ルールの策定により、国際スポーツとしての水球が確立されていく。そこで、オリンピックにおいて開催種目に採用される経緯と国際競技連盟発足との関連を考察する。

オリンピックの再興に当たっては、近代オリンピックの父とされるフランス人のピエール・ド・クーベルタン(Pierre de Coubertin)^{註15)}の尽力に負うところが大きい。クーベルタンは、自身が英国のパブリックスクールで受けた教育を踏まえ、「スポーツを通じて青少年の心身を錬磨する」ことの重要性を認識し、さらには古代オリンピックの精神を現代に復活させる構想を打ち上げた。この構想に対して多くの賛同者を得て、紆余曲折を経ながら、クーベルタンは1896年に第1回アテネ・オリンピック開催にこぎつける。第1回オリンピックの開催種目は、陸上競技、水泳、体操、レスリング、フェンシング、射撃、自転車、テニスであった。水泳では、100m自由形、500m自由形、1200m自由形、100m潜水の種目が採用され、競技はゼア湾で行われた²⁸⁾。

4年後の1900年、第2回のオリンピックはクーベルタンのお膝元、パリで開催された(表1参照)。種目にはアテネ・オリンピックにはなかった馬術競技(ポロを含む)や水上競技としてヨットや漕艇のほか、水球が新たに追加された。水球以外はすべて、個人種目であったので、水球はオリンピックの競技種目として始めて採用された団体種目と言える。しかしながら、1900年当時、フランスにおける水球は、ベルギー国境に近い一部の地域およびパリにある一部のクラブのみで行われていたことを考えると、水球が開催種目に選定されたのは、フランスにおける水球の位置付けというよりも、初期のオリンピック種目選考に対する英国の影響力を物語っている。一方で、後のオリンピック憲章に定められた、「あらゆる種類の有益なスポーツ」の一つとしてクーベルタンあるいはフランス・スポーツ協会のセイント・クレアーが、スポーツとしての水球の実利性を認知していたことの証左とも言える。

パリ・オリンピックには、英国、フランス、ベルギー、ドイツのチームが参加するが、ルールは当然、水球の覇権国である英国のASAの規則に

したがって競技運営が行われた²⁹⁾。競技結果は、質的にも量的にも世界最高水準にあった英国の水球レベルを反映し、決勝では英国がベルギーを7対2で下し、初代オリンピック・チャンピオンになった。

続く1904年のセントルイス・オリンピックにおいては、米国以外のチームは参加せず、3つのアメリカのクラブチーム同士の対戦となった(表1参照)。ランバートとグラハム³⁰⁾は、外国チームがセントルイス・オリンピックをボイコットした理由として、アメリカ式水球(Softball water polo)のルール適用を主催者から強制されたからだとしている。一方、シャロンとテリー³¹⁾は、1904年当時、オリンピックに関する理解や関心は今日とは比較にならず、ヨーロッパからは遠隔地で、コストがかかることが主な原因となり、ヨーロッパ諸国の参加意欲が削がれたからだと主張している。実際にオリンピックの全参加者数から見ると、アテネ(1896年)に参加した選手は295名、パリ(1900年)は1077名、ロンドン(1908年)は2034名、ストックホルム(1912年)は2504名と回を重ねるごとに増勢を示したが、セントルイス(1904年)は554名であった。セントルイスだけがかなり参加者数が少ないことから判断すると、水球競技において、パリ・オリンピックに参加した英国やベルギー、フランス、ドイツの欠場は、アメリカ式ルールの選択によって生じた帰結ではなく、20世紀初頭のオリンピック競技会に対する認識が希薄だったためとも考えられよう。

1908年のロンドン・オリンピックの際、組織委員会事務局長のカーシー・ラファン(Courcy Laffan)は、それぞれの開催種目において、今後は国際ルールを設け、それに基づいて競技運営を行うことを提案した。この提案を受けて、指名を受けた英国の水泳関係者は、世界の水泳競技を統括する独立競技団体の設置に動いた。そして1908年7月19日に国際水泳連盟(Federation Internationale de Natation: FINA)が設立された³²⁾。その初代事務局長は、ASAの会長でもあったイングランド人のジョージ・ハーン(George Hearn)が務め、本部はロンドンに置かれた。FINAの主な役割として次の3つがあげられる。

- 1) 水泳の国際競技会のための規則の策定
- 2) 世界の公認記録リストの作成
- 3) オリンピックにおける水泳競技の運営組織編

成

水球に関しても国際ルール策定の作業が行われた。もちろんそのベースとなったのは、水球の母国で、当時最強豪国であった英国のルールであり、1899年にASAによって制定された23項目が1908年以降、全てのFINA加盟国の水球を規定するものとして承認された。

実際のロンドン・オリンピックは、1908年の7月15、20、22日の3日間に渡ってロンドンのホワイト・シティ競技場(White city stadium)において、英国、ベルギー、スウェーデン、オランダが参加して(オーストリア、ハンガリーも出場予定であったが棄権)開催された。結果は、地元英国がベルギーを9対2で再び下して、2度目の優勝を果たした³³⁾。

ロンドン・オリンピック後の1911年、FINAは加盟国に対し、国際統一ルールに基づいて各国における水球の試合を運営することの徹底を呼びかけた。これに合わせるようにドイツでは、国内すべての協会が同一ルールでゲームをすることを徹底し、1911年にはマクデブルク(Magdeburg)でドイツ水球選手権の導入が決定され、翌1912年にベルリンで最初のドイツ選手権が開催され、ベルリンのチーム、ゲルマニア(Germania)が優勝した³⁴⁾。

米国においてもそれまで独自に発展していたソフトボールを用いた水球から転じて、英国同様の革製の硬いボールを用いた水球が導入され、ルールに関してもFINAによって規定された世界統一ルールをAAUが承認した³⁵⁾。

フランスにおいても、USFSAが国際的な公的認証を得たいと考えていたので、ただちにFINAの規定を承認し、関係する協会すべてにこれを流布した。このときのルールは、国際ルールをほぼそのままフランス語に翻訳したものであった³⁶⁾。

このようにして、オリンピック開催、FINA設立を経て、英国の水球の正当性があらためて世界で認知され、英国の水球スタイルが世界のスタンダードとして浸透していった。しかし浸透の度合いには濃淡があり、必ずしも世界各国で同時期に一斉に国際ルールに転換が進んで行ったわけではなかった。

4. 水球の受容とルールの変容

1911年以降、英国の水球が国際的な水球の標準とされるが、それ以前あるいはそれ以降も各国

の実情に合わせて水球が受容され、ルールに関しても独自の規定が盛り込まれていった。

4.1. 米国

米国においては、ソフトボール水球(Softball water polo)あるいは、アメリカ式水球(American water polo)と呼ばれ、独自の水球が発展していた。1904年のセントルイス・オリンピックで実施された水球競技で採用されたルールの詳細は不明であるが、当時とほぼ同様と考えられる^{註16)}ルールブック³⁷⁾を参照すると、いくつかの点で英国ルールと大きく異なる。主な違いを挙げると、

- 1) ゴールは幅4フィート(約122cm)、縦18インチ(約46cm)の板に「GOAL」と大きく書き、プールエンドの水面から12インチ(約30.5cm)上の壁に設置する。
- 2) ボールは、白いゴム製で直径は7～8インチ(約17.8～20.3cm)とする。ボールには満杯の8分の7程度の空気を入れ、片手で掴みやすい硬さに保ち、オイルやグリースを塗ってはいけない。
- 3) 1チーム6人とし、2名まで交代メンバーを登録できる。
- 4) 試合は、8分間の前後半を行い、ハーフタイムは5分とする。
- 5) 「GOAL」ボードにボールを保持しながら触れたら5点、投げて「GOAL」に当たったら3点、ファール後のフリースローを「GOAL」に当たたら1点とする。
- 6) ボールを持った選手を4フィートライン(約1.2m)以内で、10秒以上沈めると反則とする。
- 7) ボールを持って8フィート(約2.4m)以上潜ると反則とする。

以上のように米国ルールでは、プールエンドの壁に設置した板にボールを触れられるか、当てる事で得点となる。またボールを持った相手選手を10秒以内なら沈めることは反則ではなく、ボールを持つ選手に対して激しいタックルが許容されていた。当時の水球ゲームの様子は、次のように記述³⁸⁾されている。「プレイヤーはレスリングの技を掛けるようにお互いにつかみ合い、ボールの在り処などそっちのけで、サバイバルしようと必死になる。(中略)しばしば犠牲者となったプレイヤーは、水面に浮き上がり、人工呼吸を施こされるはめになる。」

英国ではラグビー型からサッカー型へと移行し、水中でのラフプレイをなくす方向で幾度の

ルール改正が実施されてきたが、米国ではむしろゴール前における水中での攻防が水球の醍醐味であるとの認識のもとに、一定の制限を設けてはいるものの、プロレスまがいのラフプレイを容認していた事になる。

ラフプレイが横行するアメリカ式水球を改めようと、ル・デブレング・ハンドレー (Lou DeBrenda Handley)^{註17)}は英国ルールの導入を図り、その定着を促進するために国内を東奔西走した。その甲斐あって、1908年のロンドン・オリンピックに米国代表チームを派遣することの了承をAAUから取り付けた。しかし1908年の3月に開催されたソフトボールによる全米水球選手権の決勝において、試合中に選手が意識不明となる事故^{註18)}が発生し、AAUは水球競技を禁止スポーツに指定し、ロンドン・オリンピックに米国チームを派遣する事はなかった。そして4年後のストックホルム・オリンピック(1912年)を前にして、AAUは水球代表チームの派遣を計画し、禁止スポーツリストから水球を解除する事を決定した。しかし代表選考を兼ねた全米水球選手権で再び流血・乱闘事件が発生した。事態を重く見たAAUは水球を永久禁止種目に指定し、再び代表チームの派遣を取りやめた³⁹⁾。これらの不祥事を契機にAAUはソフトボールによるアメリカ式水球から決別し、1913年に国際統一ルールを公認したが、その後1920年のアントワープ・オリンピックまで代表チームを派遣することなく、米国の水球は大きな停滞期を迎えた。

4.2. ドイツ

ドイツでは、クラブチームながらベルリン・水泳クラブが1900年のパリ・オリンピックに参加したが、その後1928年のアムステルダム・オリンピックまで国際舞台で活躍することは少なかった。その原因として水球を実施するクラブ数の少なさが挙げられる。1912年にベルリンで最初のドイツ選手権が開催された後、数年にわたってドイツでは水球熱が高まっていったが、実際に水球に取組むクラブの割合は、ドイツ水泳連盟に加盟していた総クラブ数に対してごく僅かであった。その要因として、殆どのクラブが水球の健康上、そして教育上の価値を全くとっていないほど認識していなかったこと、さらに水球の試合内容が、粗暴化傾向にあり、悪いイメージを与えていたことにあった。

ドイツでは、1904年にドイツ水泳連盟による統一ルールが導入されて以来、1906年にも改定が行われ、1908年には水球の指導教本が刊行されるなど、比較的早い段階からルールや指導方法等の確立を目指した取組みが行われてきた。また英国ルールに準拠しながらも、特にラフプレイの排除を目指して、相手プレイヤーに対するタックルを禁止しようとするなど、米国における水球の粗暴化と比べると大きな違いが見られる。さらにFINAの要請に応じて、いち早く1911年から国際ルールに基づいて国内の試合を運営する事を決定するなど、国際化についても関心が高かった。加えて、ベルリンでのオリンピック開催計画(1916年)に伴い、国内の水球強化策が検討されるなど、ドイツ内での水球は順調に発展するかに見えたが、実際には第1次世界大戦のためにオリンピックは開催されず、さらにドイツ水泳連盟はFINAから脱退し、国際舞台から姿を消した。

第一次世界大戦後、ようやく平和を取り戻しつつあった1919年に、フリッツ・ドレマーは、ドイツ水球の再興を期して再びルール改正に着手した。ドレマーは、当時ドイツ水泳連盟の役員だったW. ビンナー (W. Binner)とブレスラウ(Breslau)の協力を得て、相手プレイヤーに対するタックルと話しかけを全面禁止する新ルールを作成し、1920年にハイデルベルクでドイツ国内のみ有効のルールとして発布した。タックルと話しかけの禁止を導入することで、ドイツの水球は様相が大きく変化した。ドレマーは自著⁴⁰⁾の中で、1920年夏の試合をそれ以前の試合と比べて、次のように述べている。「ボールの奪い合いという男の勝負だった試合が、スイムと連携というチームプレイに様変わりした。以前ならば、身軽で試合運びでは勝っているチームが、ラフで力のある大柄なチームに勝つことはなかった。これが一転し、ボールを扱うテクニック、敏捷さ、コンビネーション、それにチームの連携プレイが決定的な要因となり、ラフなパワープレイは意味のないものとなった」と絶賛している。また1922年には、それまで得点される度にいちいち自陣のゴールラインまで戻り、プール中央に投げ込まれるボールを取り合っていたのをサッカーと同様にゴールが決まった時には点を取られたチームが攻撃側に回り、試合が続行されるようにした。この変更によって、ゲームの進行がスピーディーになり、ボールを扱

うテクニック、連携プレイ、そしてコンビネーションが以前にも増して勝敗の鍵を握るようになった。

このようにドイツでは、独自のルールによって水球ゲームにおけるラフプレイの根絶とボールゲームとしての魅力の向上を目指した。そしてドイツの水球レベルは着実に向上していった。この方向性は、アメリカにおけるそれとは正反対のものであり、注目に値する。そして長らく国際舞台から遠ざかっていたドイツは、国際試合への参加が認められ、1928年に復帰したアムステルダム・オリンピックでは、金メダルを獲得するという快挙を成し遂げた。

4.3. フランス

フランスにおいては、1896年セント・クレアーによって広められた最初の水球ルール⁴¹⁾では、第1条「ボールはサッカーの通常のボールでなければならぬ」、第2条「ゴールは太文字でゴールと書かれた長さ1.20mの2枚のボードで構成される」、第3条「相手のゴールにボールを接触させることによってゴールを挙げることができる」、第4条「チームはそれぞれ6人の選手で構成される」と明記されている。このルールでは、得点条件は未だラグビー・フットボールの条件であり、既に英国で導入されていたサッカー型の条件とは異なる。前述の条文は、1888年以前の英国ルールを参考に行っていると思われるが、細部において英国ルールと異なる点も多く、水球がフランスに導入された当時は、国内で統一されたルールは存在せず、クラブごとに独自のルールで試合を行っていたと考えられる。

だが1900年のパリ・オリンピックを契機にフランスではスポーツとしての水球の認知が高まり、それ以後フランス選手権が開催されるようになる。パリ・オリンピックでは、英国ルールが採用されたが、だからと言って当時のフランスにおけるすべてのチームが英国ルールを無批判に取り入れたわけではない。今日であれば、オリンピックが最高の競技レベルを競う場としての権威を持ち、そこで採用されるルールが公式ルールとしてのお墨付きを得て、各国チームもそれに倣って競技を運営する事になる。しかしながら20世紀初頭におけるオリンピックでは、クーベルタンによる理念が先行し、実質的な権威はそれ程高くなく、各国の国内スポーツ行政に及ぼす影響力も限定的

であった。また1908年のロンドン・オリンピックを契機に設立されたFINAについても、加盟国に対する確固たる組織的ヒエラルキーを構築できておらず、FINAの公認ルールが世界共通ルールとしてあまねく世界に浸透していったとは言えない。

この点について、FINAが国際公認ルールを導入した前後となる1905年と1912年にジョージ・モーム(Georges Moëbs)が書いた2つの文章^{注19)}の比較をすると、競技に関する規則にはほとんど変化がなかった。つまりFINAからの国際公認ルールが発布されたとしても、フランス国内においては、競技のあり方に関して変化しなかったと考えられる。そして1912年以降もフランスにおいて水球は独自のルールを残しながら発展を遂げ、リール、パリ、マルセイユ、ニース、リヨンなどのフランス各地に水球の拠点ができ、全国ではUSFSAに加盟する250の水泳協会(約27,500人の会員)が選手権や水球の試合を含む水上祭典に参加していた⁴¹⁾。しかしながら水球の試合会場は、英国やベルギーと異なり、一部を除いて、河川や湖沼あるいは港が用いられていた。フランスではプールの建設は英国に比べると遅れていたが、奇妙な事に競泳より水球のほうが「スポーツ的」であるとして一般市民には普及していた。これは競泳がライフセイバーなどのプロフェッショナルとUSFSAが統括するアマチュアの間で常に軋轢を生む対象であった事に由来する。よって20世紀初頭、フランスにおいては競泳より水球のほうが水中での運動として普及し、1920年以降凋落する英国に代わってフランスが台頭していった。その成果は1924年にパリで開催されたオリンピックにおいてフランスチームが優勝した事からも伺える。

5. まとめ

英国で生まれた水球は、英国との関わりの深い人物を介して、1888年以降、アメリカ合衆国およびヨーロッパ各国へと伝播していった。各国に伝播した水球は、いずれも英国水球をモデルとしたが、導入後は各国の事情に合わせてゲームの構造が変化し、ルールも変更された。各国固有に水球の意味や面白さを受容し、それに基づいてルールが変更、更新されていったといえる。特に米国においては、ラグビー・フットボール式に近い、ラフプレイの多い水球を発展させるという意味

で、独自性が際立ち、あえて英国水球と区別するためにアメリカ式水球(American water polo)と呼ばれた。

やがてオリンピック種目に採用されたのを契機に、国際的なルール統一の機運が高まる。さらにFINAの設立によって、ASAが規定したルールの正当性に対してお墨付きが与えられ、加盟各国に対して強要されることになる。それらのルールの変更は、ラフプレイをなくし、選手の安全性を確保しつつ、素早い動きとゲーム展開を確立することが目指されたといえる。しかし20世紀初頭において、FINAの権威は未だ確立されておらず、オリンピックに対しても世界最高峰の競技会であるとの認識は低かった。よってオリンピックの公式ルールであろうと、FINA公認のルールであろうと、各国が例外なく受け入れる状態にはなかった。各国独自に受容された水球とルールがまだ生きていたといえる。

このような状態は、第1次世界大戦が終了するまで続く。そして水球が国際スポーツとして認知され、オリンピックが世界一を決める場として機能するのは、第1次世界大戦後のアントワープ・オリンピック(1920年)といえる。この大会には、12カ国が参加し、計99試合が行われ、世界一を決めるのにふさわしい大会となった。しかし皮肉な事に、水球の母国である英国はこの大会における優勝を最後に、世界の檜舞台から姿を消す事になる。この事は、各国に伝播した水球が一定の普及を遂げたことを示すとともに、水球が英国のスポーツから、国際スポーツへと変化した証とも言える。

注

^{注1)} 英国(Great Britain)とは、ブリテン島を構成する3つの地域イングランド、ウェールズ、スコットランドの総称とする。なお、個別に特定の地域を指す場合には、イングランド、スコットランドなどと表記する。

^{注2)} ジョン・ロビンソン(Jhon Robinson)は、イングランド生まれで生年月日不詳。プロフェッショナルスイマーとして活動し、1876年にBournemouth Premier Rowing Clubで行われた水球の試合に参加。1884年からイングランドのLancashire Clubに所属し、1888年に米国に渡り、1916年までBoston Athletic Associationで水球の

指導に携わる。

注³) フリッツ・クニーゼ(Fritz Kniese)は、ロンドンのクラブで水球をプレイする機会を得て、祖国ドイツのベルリンに帰った時に自分のチームであるボルシア・ベルリン(Borussia-Berlin)に水球を伝えた。

注⁴) フゼーレッシ・アルパード(Füzéressy Árpád)は、ハンガリーのベストで弁護士をする傍ら、ハンガリー水泳同好会(MUE)の主要メンバー。英国の水泳雑誌を講読中に水球の存在を知り、アマチュア水泳協会(ASA)に手紙を書き、水球ルールブックとボールを取り寄せ、自らのクラブに水球を導入した。

注⁵) アメリカにおける最初の水球の試合は、1890年1月28日にロードアイランド州のプロビデンスにあるサンタリー体育館で行われた水泳の祭典における1つの催しとして開催された。試合は各チーム6名、10分ハーフで行われた。

注⁶) ボールは、ゴム製で直径が7~8インチとし、満杯の8分の7程度に膨らませ、片手で握れるように、表面には油、グリースなどを塗ってはいけない。

注⁷) 例えば、ハンブルクのクラブは、イングランドルールを用いて試合を行い、プレイヤーに対するタックルを認めていた。

注⁸) ハンブルククラブのルールでは、プレイヤーに対するタックルを認めていたので、結果的にラフプレイが頻発し、ケガをするプレイヤーも続出した。

注⁹) ベルリン・ブランデンブルク地区のビショッフ(Bischoff)、ブラック(Dr. Brack)、ドレーマー(Droemer)、クローン(Krohn)およびホフマン(Hofmann)からなる委員会が結成され、ルール改正が討議された。

注¹⁰) 通常定期戦は、リールの微温浴場(Tépidarium)とブリュッセルの王立浴場(Bain Royal)において開催された。

注¹¹) ポール・バルシェ(Paul Blache)は、フランス最高のスイマーとして称えられ、ライフセービング協会の活動にも尽力した。

注¹²) トルージェントストロークとは、イングランド人のトルージェントによって考案された泳法で、クロールの原型と言える。特徴は、腕のかきが終わった後、腕を水上に出してリカバリー動作をすることで、抵抗を減らし、泳速度の飛

躍的向上につながった。

注¹³) フランスからは、Libellule de Paris、Pupilles de Neptune de Lille、Tritons Lilloisのクラブが出場し、Pupilles de Neptune de Lilleは2チームをエントリーしたため、合計4チームが参加した。いずれのチームも準決勝で敗退し、決勝に進出することはできなかった。

注¹⁴) 1901年当時、ハプスブルク家がオーストリア帝国とハンガリー王国で二重君主として君臨し、オーストリアとハンガリーは外交などを除いて別々の政府を持ちながら連合するオーストリア・ハンガリー帝国を形成していた。第1次世界大戦でオーストリア・ハンガリー帝国は敗戦し、ハンガリーはオーストリアから分離され、独立国となった。

注¹⁵) ピエール・ド・クーベルタン(Pierre de Coubertin)はフランスの教育者であり、近代オリンピックの創立者として知られる。歴史書のオリュンピアの祭典の記述に感銘を受け、「ルネッサンス・オリンピック」の演説のなかで近代オリンピックを提唱し、賛同者による国際オリンピック委員会(International Olympic Committee: IOC)の設立、1896年のアテネ・オリンピックへの開催へとつながった。国際オリンピック委員会事務局長、第2代国際オリンピック委員会会長などをつとめた。

注¹⁶) 合衆国水球協会(United States Water Polo Inc.)の歴史・殿堂委員会の委員長であるチャールズ・シュローダー(Charles Schrode)氏の私信によれば、アメリカ式水球(American water polo)における初期ルールと1920年代ルールはほぼ同様であるとの示唆を得た。

注¹⁷) ル・デブレンダ・ハンドレー(Lou DeBrenda Handley)は、水球選手として1902年~1928年まで活躍し、セントルイス・オリンピックでは金メダルに輝いた。ニューヨーク・ヘラルド紙のスポーツ記者として活躍する傍ら、水球の国際ルールを米国に定着させようと米国国内を東奔西走し、その功績が認められて、1967年水泳殿堂入りしている。

注¹⁸) 1908年、米国水球選手権の決勝戦で、ニューヨーク・アスレティック・クラブとシカゴ・アスレティック・クラブが対戦し、激しい戦いの末、双方の選手が意識不明となる事故が起こった。

注¹⁹) ジョージ・モーム(Georges Moëbs)が水球の

ルールに関して、記述した文献として次の2つがあげられる。Moëbs G. (1905) : *Le water-polo*, In *Les sports medernes illustres*, Moreau, P. and Voulquin (Eds), Larousse: Paris, pp.318-319. Moëbs G. (1912) : *Water-polo*, In *Les sports nautiques*, pp.79-84.

引用文献

- 1) 高木英樹, 真田久 (2005) : 英国における水球 (Water Polo) 競技の始まりとルールの変遷に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要, 28:79-90.
- 2) Lambert, A.F. and Gaughran, R. (1969) : *The Technique of Water Polo. A text for Player and Coach*. Swimming World Books: North Hollywood, CA, p.5.
- 3) Droemer, V.F. (1922) : *Lehrbuch für das Wasserballspiel* (Vol. 4. verv. und erw. Aufl. mit den amtlichen Regeln) . August Reher: Berlin, p.12.
- 4) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *Une histoire du water-polo*. L' Harmattan: Pris, p.39.
- 5) Veto, J. (1965) : *Sports in Hungary*. Corvina Press: Budapest, p.69.
- 6) Wigo, B. (1996) : *The history of USA water polo in the Olympic Games*. The Olive Press: Olive, CA, p.2.
- 7) Smith, J.R. (1989) : *The world encyclopedia of water polo*. Olive Press Publications: Los Olivos, p.316.
- 8) Smith, J.R. (1964) : *A history of the game of water polo*. Swimming Technique, October, pp.58-59.
- 9) Juba, K. (1972) : *All about water polo*. Perham Book: London, p.27.
- 10) Sullivan, F. J. (1925) : *Intercollegiate swimming guide : containing official rules for swimming, fancy diving, intercollegiate water polo, international or soccer water polo*. American Sports Publishing: New York, p.23.
- 11) Lambert, A.F. and Gaughran, R. (1969) : *op.cit.*, p.6-7.
- 12) Villepion, G.D. (1929) : *Nageons!*, Grasset: Paris, p.186.
- 13) Heydn, G., John, H.-G., Lingenu, W. G. t., Scherer, K. A., & Wilke, K. (1986) : *100 Jahre Deutscher Schwimm-Verband*. Busche Verlagsgesellschaft: Dortmund, p.32.
- 14) Droemer, V. F. (1922) : *op.cit.* p.12.
- 15) Droemer, V. F. (1922) : *op.cit.*, p.13.
- 16) Ibid.
- 17) Droemer, V. F. (1922) : *op.cit.*, p.14.
- 18) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, p.46.
- 19) Ibid.
- 20) Brussels Swimming and Water-Polo Club (1913) : Annual report 1913. Brussel.
- 21) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, p.47.
- 22) *L'Echo du Nord*, 10 et 1898/07/16.
- 23) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, p.48.
- 24) Clair, G. De S. (1896) : *La natation*, Colin: Paris.
- 25) Mallon, B. (1997) : *The 1900 Olympic Games Results for all competitors in all events, with commentary*. MacFarland & Company: Jefferson, CA, p.224.
- 26) Gyarmati, D. and Csurka, G. K. (2002) : *A Magyar vízilabdázás története*. Minden jog fenntartva: Budapest, p.8.
- 27) Pánczél, (1934) : *A Magyar vízipóló története*, Kídas: Budapest, pp.13-18.
- 28) Lambert, A.F. and Gaughran, R. (1969) : *op.cit.*, p.6-7.
- 29) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, p.48.
- 30) Meuret, J. and Belhadj, C. (2001) : *HistoFINA, 1908-2001 (5th edition)* . Federation Internationale de Nation: Lausanne.
- 31) Mallon, B. (1999) : *The 1908 Olympic Games Results for all competitors in all events, with commentary*. MacFarland & Company: Jefferson, CA., pp.272-275 .
- 32) Droemer, V. F. (1922) : *op.cit.*, p.15.
- 33) Lambert, A.F. and Gaughran, R. (1969) : *op.cit.*, p.8.
- 34) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, p.55.
- 35) Sullivan, F. J. (1925) : *op.cit.*, p.23.
- 36) Menke, F. (1957) : *Encyclopedia of Sports*. A.S. Barnes and Co.: New York, pp.973-975.
- 37) Wigo, B. (1996) : *op.sit.*, p.4.
- 38) Droemer, V. F. (1922) : *op.cit.*, p.16.
- 39) Clair, G. De S. (1896) : *La natation*, Colin: Paris, pp.99-100.
- 40) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, pp.50-51.
- 41) Charroin, P. and Terret, T. (1998) : *op.cit.*, pp.57-58.

表1 初期のオリンピックにおける水球の上位チーム

大会年, 開催地	出場チーム数	順位	ルール	備考
1900 パリ	7	1. イギリス 2. ベルギー 3. フランス	イギリス式	セーヌ川で実施 1回戦には 2000人の観客
1904 セントルイス	3	1. ニューヨーク 2. ミズーリ 3. シカゴ	アメリカ式	博覧会場内の湖
1908 ロンドン	4	1. イギリス 2. ベルギー 3. スウェーデン	イギリス式	
1912 スtockホルム	6	1. イギリス 2. スウェーデン 3. ベルギー	イギリス式 Bergvall System*	
1920 アントワープ	12	1. イギリス** 2. ベルギー 3. スウェーデン	国際ルール Bergvall System	女子水球がデモン ストレーションとして実施***
1924 パリ	13	1. フランス 2. ベルギー 3. アメリカ	国際ルール Bergvall System	
1928 アムステルダム	14	1. ドイツ 2. ハンガリー 3. フランス	国際ルール	

* Bergvall System: スウェーデン水泳クラブ会長の Eric Bergvall の考案によるもので、2位の決定は優勝したチームに敗れたチーム同士の対戦で決められる。3位は2位のチームに敗れたチームで競う。1924年のオリンピックまでこの方法が適用された。

** イギリスの Paul Radmilovic は1908、12、20、24、28の5回のオリンピックに出場した。

*** 女子水球(1920) オランダ水泳協会の報告書(1920-21)によれば、オランダ女性水泳クラブ(Dutch Ladies' Swimming Club)により、アムステルダムとロッテルダム出身の14人の女性による、水球のデモンストレーションが行われ、女性の水球の宣伝にはすばらしく、将来のオリンピック種目に入るだろう、と書かれている

る。別のオランダの新聞では、「このイベントはすばらしかった。このデモンストレーションは成功し、多くの海外の水泳関係者が女性スイマーによる水球の競技を絶賛したと報告されている。なお、この試合の結果は、2-2のタイであった。(Mallon B.2003. pp.336-337) なお、女子水球の試合についての記述は、既に1903年の"Times"の記事に見られる。ウェストミンスター・バースにある、ラベンスボルン水泳クラブ(Ravensbourne Swimming Club)が、イングランドのスイマーを集めて、水泳大会が開催された際、女子水球(Ladies' Water Polo Challenge Shield)も行われ、決勝戦で Swansea Ladies が London を9対5で破って優勝したことが報告されている。(Times, 1903.10.5.)